

## 医事・文談 九百四十六 平岸 三八

《正岡子規(36)の続き》その234  
子規と漱石(四十三たび続)

漱石が下宿していた上野家へ、日清戦争に従軍記者として大陸に渡り、不衛生な戦地の生活に宿痾の結核を増悪させ、九死に一生を捨てて故郷に帰ってきた子規が転り込んできた。

当時、上野家には祖父母と孫娘のより江(11歳、前号に12歳としたのは誤り)が居た。そのより江が後年(昭和8年8月13日)に書いた回想記がある。それが河東碧梧桐編著の『子規言行録』に載っている。この書は、子規35回忌に際し、昭和11年11月に編まれたものである。子規にとつての生涯の大恩人で、物心両面の庇護者であった陸羯南を初め家人、知友、門下55人の追想記を集めたものである。

久保より江さんの文は「一番町の家」と題されている。現在はどうか分からないが、より江さんが住んでいた当時は、そう呼ばれていたであろう。この文章が書かれた昭和8年の数年前、久々に松山に帰ったところ、昔の上野の家が蕎麦屋とかに変わっているとの風説があつたので、実際どの家が昔の上野の家かたしかめてほしいと言われたし、自分としても幼い時に住んだ家をよそながら見たいと思つたのであつた。

漱石、子規が下宿していた時から30年も経過し、有為転変で、どれが上野家か分からなくなつていたのであろう。

より江の夫君・猪之吉も松山に關係があつた。いつか松山の話が出た時に、「自分も松山に行ったことがある。中学時代(福島県安積中学)特にお世話になった先生が、松山中学に転任されたので行つてみたのだ」という。短い滞在で、どこの町か記憶にないというが、その先生が大塚又兵先生だと聞いて驚いたものだった。大塚先生ならば、同じ町内で、上野よりも三番町によつた同じ側に住んでいて、立派な白髯の持主で、翌字の先生でよく見受けた方であつた。主人が第一高等中学の

学生時代で、泊めて貰つたのもこの横丁のお家であらうと思われる。

昔は静かな屋敷町で、竹藪つづきで恐ろしいような位だったのに、この頃はなかなか賑やかな街になつていて、従つて「上野の隠居家変じて蕎麦屋となる」というような噂も立つたのであろう。

しかし、幸いにもそれは風説に過ぎず、思つたより低い軒の上野の家は、依然としてれんじ窓、格子戸造りの家はそのままにあつた。今は母屋と離れ座敷は全く別になつていた。

漱石・子規が離れに下宿していた当時は、より江さんの両親は東豫の鉾山に行つていた。東伊豫の鉾山といえは別子銅山だらう。より江さんは学校を変わるのがいやで、祖父の家に預けられていたのである。

漱石・子規の世話から、祖父母、それにより江さんの面倒を見たのは伯母で、女中相手にかいがいしく立働いていた。

もともと母屋は祖父が買い、のちに隠居屋として離れを建てたものであつたが、いろいろな事情でそこに住むことができず、漱石や子規に貸したために永く残ることとなつたのである。

子規が移つてきた時は、丁度夏休みで、父母の許へ遊びに行つていて、休暇明けで帰つてきてはじめて、離れの階下に病人のお客が増えたことを知り、伯母のうしろにそつと添つてはじめて子規の部屋に行つた時、一番先に目についたのは支那からでも持ってきた時、一筆先に目についたのは支那にあつたと書いていた。筆まめな子規の書いたものにも、そのことはないようだが、支那の新婚夫婦合巻の際の赤い枕を持参したのだろうか。どうもそんなことはあり得ないように思うが、それとも松山のどこかの家にそんなものがあつたのだろうか。

短い期間だったが、より江さんは、子規、漱石に大変かわいがられたという。後年俳人として名を成したより江さんだが、句会の末座にかしこまつた夜もあつたと書いてあるから、そんな幼少のときから俳句をたしなんだのである。或は子規の最も幼い弟子であつたのであろう。11歳で句会に列するとは早熟の才恐るべきものがあるようである。

(表紙写真)

### 初冬のななかまど

札幌市医師会 伏屋 哲夫

初冬というか11月はじめ、前夜から少しづつ降っていた雪も路上はほとんど消えてしましましたので、樹上の雪も消えたかな、などと思いつつ、取りあえず真駒内公園に出かけてみました。陽は照っていませんでしたが、実も葉も大

分落ちてしまった「ななかまど」に、ほんの少しばかりの雪がついていました。多少干からびた感じでしたが、冬まじかの風情が感じられて撮ってみました。

(昨年11月撮影)